

本会共同調査と研究報告(2)

「うそ」に対する反応とその成長

—笑い話を実験資料として—

(原稿整理担当) 飯住良夫

私たちは、子どもの頃、大人たちが使う言葉が理解できずにとまどったことを、しばしば経験したのを憶えている。その言葉に対して、とまどいの中にも大へんな新鮮さを感じたことも憶えている。どういふことなのだろう……などと、首をかしげ、あれこれ詮索しやうと、その意味をつかんだ時の喜びや、とうとう、その言葉を自分のものにしたぞ、その言葉を乗り越えたぞという自信と自分の広がりを感じたことも、現在でも、なお、思い出すことができる。

このような経験を、「笑い話」との出会いにおいても持ったことであろう。「笑い話」のオチがわからずに、笑うに笑えない経験は、誰しも持つところである。

「笑い話」とは、何か、「オチ」とは、人間にとって何なのかなどと問うのも、何か笑いを呼びそうであるが、どうしても、そこには、捨て切れないものがある。

「笑い話」を聞いて、笑えないということは、その「笑い話」の持つ構造の間隙(からくり)を、感知できないということであろう。

こう考えてみると、私たちは、「笑い話」について、言葉のはたらくと、そこに動く人間の思考や感情との密接な結びつきがあることを見つけざるを得ないであろう。

得ないであろう。

「笑い話」は、人間が、ある日、どこかで、言葉を駆使し、「ことばによるからくり」を作り出したものと考えれば、その「からくり」の様子が、人間の持つ思考の型や感情の状況やらを示しているものと考えられる。

「からくり」の構造を、我が物とすることによって、初めて、「笑い」が生まれるのである。

そこで、今回は、子どもたちは、いったいに、「ことばによるからくり」の構造を、どこで、どのように身につけるのか、また、その構造をつかむということは、子どもにとって、どういふことなのかを知りたく思い、この調査を始めたわけである。

一、調査に使った笑い話と

テスト形式

1 つぎの

小さな

のことはをいれないさい。

大きな

だんなが、こぞうさんをつれて、お客にきました。

さしきにとうされたとき、こぞうさんが、とつぜん

「だんなさあ。」と

だんなさまのえりもとに、手をやって、

「こんなところに、しらみがおりま

す。」

だんなは、はらをたてて

「そんなことは、
うもんじゃ。このあほうめ。」

すると、こぞうさんは、

「いいえ、だんなさま。」と

声で言いました。

「よく見たら、しらみやなくて、わたくずでした。」

(正答 大きな、小さな)

2

つぎの
のことはをいれないさい。

店へやってきた、ふたりづれのお客さん。さっそく、ひとり、きせるをとりあげました。

ところが、のもうとすると、つまっている、すえません。

「どれ、ちょっと、かしてみな。」

もうひとりのお客がいました。

すると、はじめのお客は、

「いや、わしにする。」と

言って、また、あれこれやってみ

すが、きせるは、とうりません。

あいての客は、はらをたてて、

「えい、はやくよこせ。」と

ひったくろうとします。

「いやだ。」

あいては、わたそうとしません。

ふたりのようすを見ていた家のある
じが、おくへ声をかけました。

「これだれか。あっちの客にも」

をもつてきてあげな。

をもつてきてあげな。」

(正答 つまっただきせる)

3 つぎの話を読んで、「一人、二人、
三人」をえらんたり、 の中に、
ことばをいれなさい。

むかし、ある山寺で、三人のぼうさん
が、むごんの行をしました。むごん
の行というのは、どんな場合にも、け
つして、ものを言つてはならないので
す。

三人のぼうさんは、一つのへやに、
ならんですわつて、むごんの行を始め
ました。

夕方ちかく、寺の小ぞうが、ともし
びをともして、へやのまん中において
きました。

だんだん、夜がふけていきます。そ
のうちに、油がぎれてきたらしく、へ
やの中がすうつと暗くなりかけました。
あかりのそばから、一人めのぼうさん
が、

「おい、早くきてくれ。あかりが消
えそうだ。」

それを聞いて、となりのぼうさんが、

「これこれ、むごんの行の最中にも
の言うう人がありますか。」

と、たしなめました。

すると、「一人・二人・三人」めの
ぼうさんが、こう言いました。

「

(正答 三人め・ものを言わずにいる
のはわしひとりじゃ。)

4 ある病人が、医者のところに行って
きました。

「先生。どうも、朝おきてから、い
つも、三十分、おながいがいたくてし
ょうがないんです。」

お医者さんは、こういいました。

「それじゃ。毎朝、三十分、おそく
おきなさい。」

問 あなたは、この話を読んで、もし
病人の立場だったら、お医者さんの
ことを、どう思いますか。

5 笑い話「大山君と小川君」

大山君は、とてもよく勉強ができま
す。

小川君は、あまり勉強ができません。

先生が、大山君に質問しました。

大山君は、答えました。

先生は、

「よろしい」といいました。
つづいて、小川君に、同じ質問をし
ました。

小川君は答えました。

「大山君の言ったとおりです。」

「言ったとおりでは、わからない。

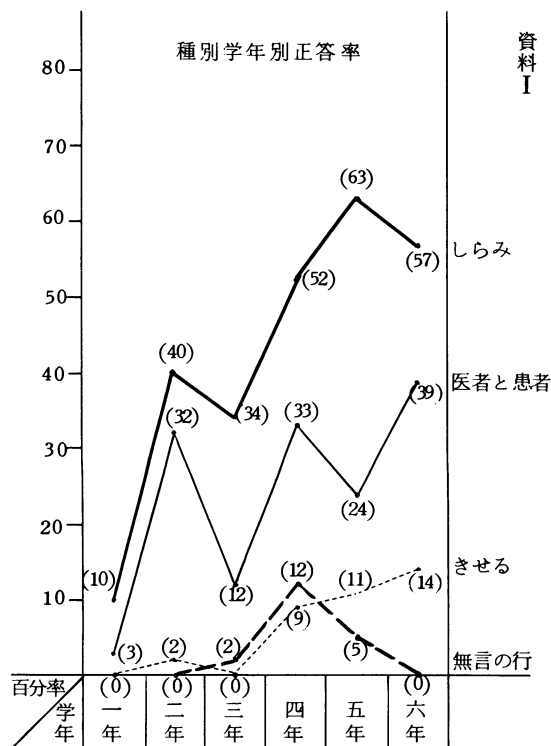
言いなおしなさい。」

「言いなおしたら、まちがいます。」

問 小川君は、言いなおしたら、なぜ
まちがうのでしょうか。あなたの考え
を書いてください。

二、資料編

資料 I



() 内数は百分率を表わす。「大山君と小川君」は正答 0

※代表例は典型例を示した。

三、調査の結果について

資料Ⅲについては、資料Ⅱにでた各類を、学年別、類別の人数を見たくて作成したものである。

話が一つの壁になっているものと考え

たから。」
となつてゐるのに比し、A2/A7ま

△印×印と記す」があるが、ここで、注目したいことは、×、△が、「無言の行」と「医者と患者」に集中してい

ることである。ここに入る子どもたちは、この二問のために、A1類に入れないわけである。このことから、この

人数	C 1	B 21	B 19	B 18	B 16	B 15	B 14	B 11	B 10	B 4	A 20	A 18	A 15	A 14	A 12	A 10	A 9	A 8	タイプ
正答 14											○	○	○	○	○	○	○	○	二年生 (私立玉川学園小学部) 35名
1		△	△	△	△	△	△	△	△	○	△	△	△	△	△	△	△	△	きせる
26	○				○	○	○	○	○	○					○	○	○	○	無言
0	△			△				△	△				△	△		△	△	△	患者と
12	○		△	△		△	○	△	○	○	△	○	△	○	△		△	○	笑い話
0																			人数
	1	1	1	1	2	3	3	6	2	1	2	1	1	2	3	1	2	2	タイプ
	大小大	大大小	小小大	大無小	大無無	小大大	小大大	大小大	大大小	"	"	"	"	"	"	"	"	大小小	しらみ
	きせる	"	"	"	"	"	"	"	きせる きせる	つまったきせる きせる	"	"	"	"	"	"	"	きせる きせる	具
	しゃべっちゃいけない	あかりが消えそうだ	おぼろさんがブーをしたぞ	ものを言う人がありますか	無	おい早くきてくれ	無	なぜしゃべっている。いけないよ	おまえもしゃべった	だってあかりがきえちゃうもの	早く来てくれあかりが消える	無	しゃべっちゃだめ	ものを言う人がありますか	無	しゃべっちゃだめ	行の最中にもを言うやつがあるか	無言の行	事例
	それは同じだと思う	30分おそくおきる	バカなやつ	30分おそくおきない	無	ばかだと思う	30分おそくおきても同じ	ばかだと思う	あとになつておながいがいたくなる	30分おそくおきても同じ	ばかだと思う	"	あたまがくるつている	30分おそくおきても同じ	ずるいと思う	いうことをきく	30分おそく起きても同じ	医者と患者	(代表例)
	ちがう答をいったらまちがえる	わからなくなったら	"	わからなくなるから	無	ぺんきようができないから	ぺんきようができない	あたまがわるい	大山君の意見をしらないから	いいなおしたらまちがえる	わからなかったから	まねができないから	まねすると人の名前いうから	無	まねしたから	いまのがあつていたから	あたまがわるい	笑い話	

られる。(資料Ⅰ参照) 正答が低い。特に「無言の行」)

このことは、他の特徴とも関連があると考えられるので後述する。

また、 $A2 \setminus A7$ と $A8 \setminus A10$ を比較してみると、 $A8 \setminus A10$ については $A2 \setminus A7$ より「きせる」ができてい

なく、一つの壁になっていると言える。
A 8 / A 10 の子どもは、ここで、「き
せる」を克服しなければならぬわけ
であるが、その返答をひろってみると、
A 8 「はやく、きせる」
A 9 「きせる、きせる」
A 10 「きせる、きせる」

この「きせる」の話についての事例
中、「きせる、きせる」という事例が
大へん多数あった。

「きせる、きせる」という返答でも
この話が、笑い話にならないでもない
が、「つまったきせる。つまったきせ

る。」とするのでは、やはり、笑う話としての構成からすると、ちがいでてくる。

つまり、この「きせる」の話は、笑いを呼び起こす核心を、きせるの穴に
おいていると考えられるからである。
きせるの穴に対する主人の意識のあり

様が核心となっているのであり、また読む方にとっても、このきせるの穴そのものの効用ということについての意識を持ち合わせているかどうかによって、この話が、笑い話になるか、ならないかが決ってくるのである。

二人の客が争いをしている。その原因が、きせるの穴を通し抜くことにあつて、二人の客からすると、きせるの穴を通して、早く、きせるをきせるとし

て使う、つまり、きせるの穴そのものの本来の機能をとるもどきせたいということにあることが、主人の眼には、きせるのとりあいであると思えてしまっているのである。

この争いの唯一の解決は、きせるの「穴」があくことであり、そこへ、穴のあいたきせるを持つてくることである。

こう考えてみると、「きせる、きせ

る」とすると、「つまったきせる、つまったきせる」とするのでは、笑い話としての構成がちがってくるものが自明のこととなる。

A8/A10の子どもたちにとっては、まさしく、「穴」が「穴」であつたわけである。「欠如」に対する意識の志向に、「穴」があつたわけである。

この「きせる」についての正答は、四年から出ているが、全体としては、

大へん低い正答率を示している。(資料I参照)

低い原因が、先述のようなことを、読みとれなかったことにあると考えられるが、このことからすると、ことばの認識にかかわるところにおける、「不在」への志向が、子どもたちにとっては、たいへんな壁になっていると言えよう。イソップ童話に例もあるが「不在」そのものへは気づきはするの

人数	正答	F	D 1	B 20	C 7	C 3	C 2	B 19	B 16	B 11	B 9	B 10	A 25	A 21	A 10	A 8	タイプ		
14													○	○	○	○	しらみ	三年生	(横浜市立三ツ沢小) 41名
0				△				△	△	△	△	△		△	△	△	きせる	無言	
22						○	○		○	○	○	○	○		○	○	の無言	患者と	
1					△		△			△	○	△			△	△	行	患者と	
8			○	○	○	○		△		△	△	○	△			○	患者と	患者と	
0			?														笑い話		
		2	1	2	1	1	3	7	3	5	1	1	1	6	5	2	人数		
		無			小大小	小大小	小大小	小大小	小大小			小大小				小大小	しらみ		
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる			きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	きせる	具	
		無			きせる	きせる													

タイプ	4年生（私立玉川学園小学部）33名										タイプ	具 体 事 例										（代表例）																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																								
タイ	しら	き	無	医	笑	人	しら	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ	き	無	医	考	あ

であるが、「不在」を、ずれとして扱うには、まだ、ほど遠いところに子どもたちはいると言えよう。

特徴2

A12～A15の間に、三・四・五年の所に、一つの空白ができてゐる。この

空白は、何を語っているのであろうか。それぞれに、共通していることを、「無言の行」の誤答があるということになろう。

「三人目」とおさえていても、せりふが、うまく入っていないかったり、

「三人目」が、おさえられなかったり

空は、何を語っているのであろうか。

この点に注目しながら、三・四・五年のそれぞれの類の事例を見てみると、

(三) 「何も言つてはいけないよ。」

(×) 「ものを言う人がありますか。」

三年生

A10

A10

二年

A
12A
14

(無)「ものを言う人があります」

か。

— 2 1 —

人 数	F 6	C 1	B 21	B 17	B 14	B 12	B 10	B 7	B 6	B 5	B 3	B 2	A 28	A 26	A 24	A 23	A 21	A 18	A 17	A 16	A 14	A 12	A 10	A 11	A 9	A 8	A 7	A 6	A 4	A 3	タイ プ	六年生 (横浜市立芹が谷小)	77名																																																																																																									
46	無												○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	し ら み	き さ る	無 言 の 医 者 と 患 者	笑 い 話																																																																																																							
15	無			△	△	△	△	○	○	○	○	○					△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	○	○	○	○	き さ る	無 言 の 医 者 と 患 者	笑 い 話																																																																																																							
47	無		○			○	○				○	○	○	○	○	○		△	△	△	△		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	無 言 の 医 者 と 患 者	笑 い 話																																																																																																								
0	無	△	△		△		△			△	△	△			△	△			△	△	△		○	△		△	△	△	△	△	△	△	行 言 の 医 者 と 患 者	笑 い 話																																																																																																								
28	無		○		○	○			△	○		○				○		○				○	△		○	△	○	△	△	△	△	○	患 者 と 医 者	笑 い 話																																																																																																								
0	無																			△								△					笑 い 話																																																																																																									
	5	1	1	6	1	4	3	1	2	1	3	2	2	1	1	4	1	7	2	2	2	3	2	1	2	7	5	1	1	2	2	人 数	タイ プ																																																																																																									
	無	大小 大	大小 小	大小 大	大小 大	大小 大	大小 大	大小 小	"	"	"	大小 大	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	大小 小	し ら み																																																																																																									
	無	おち ゃ	き せ る た ば こ	"	"	"	き せ る き せ る	"	"	"	"	き せ る つ ま つ て い る の	"	き せ る 通 る き せ る	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	き せ る き せ る	"	"	"	"	つ ま つ た き せ る "	き せ る	具																																																																																																								
	無	だ ま つ て い な さ い	う る さ い ぞ	あ か り を つ け ろ	二 人 目 の ぼ う さ ん が	ぜ つ た い 話 か け る な よ	み ん な し ゃ べ つ た	あ な た も の を 言 つ た	"	だ け ど 火 が 消 え て し ま う	き み も の を い つ た	そ の と お り じ ゃ	ど う も す み ま せ ん	ま ず だ ま つ て い ま し よ う	行 の 最 中 に 話 す な	"	油 が き れ る	も う や め だ	そ う い う あ な た も し ゃ べ つ た	も う よ そ う	し ゃ べ つ ち や だ め	油 が き れ そ う だ	お い 何 を や つ て い る	ナ シ	"	き せ る き せ る	行 の 最 中 に 話 し て は な ら な い	そ う い う 場 合 は し よ う が な い	"	行 の 最 中 に も の を 言 う 人 が あ り ま す か	無 言 の 行 例																																																																																																											
	無	学 校 に お く れ る	30 分 お そ く お き て も か わ り な い	く す り を く れ ば い い	30 分 お そ く お き て も 同 じ	見 て や れ ば い い の に	け ち ん ぼ	30 分 お そ く 起 き て も 同 じ	お な か が い た く て ね む れ る か な	む せ き に ん	30 分 お そ く お き て も 同 じ	何 分 お そ く と も お き る か ら だ め	勝 手 だ	な ま け て い る	く す り で も く れ	30 分 お そ く お き て も 同 じ	一 応 や つ て み る	30 分 お そ く お き て も 同 じ	"	む せ き に ん	30 分 お そ く お き て も 同 じ	む せ き に ん な 医 者	ち こ く し て し ま い ま す	30 分 お そ く お き て も な お ら な い	や ぶ 医 者	30 分 お そ く 起 き て も お な か は い た む	こ れ で も 医 者 か	す じ の 通 つ た 説 明 を し て ほ し い	い い か げ ん な 医 者 だ	医 者 と 患 者																																																																																																												
	無	聞 か な か つ た	わ か ら な い か ら	聞 い て い な か つ た	ち が つ て し ま う	わ か ら な か つ た	ち が つ て し ま う	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な か つ た	聞 い て い な

資料Ⅲの1

A	1					•			1
	2					•			1
	3					•	•	••	4
	4					•		••	3
	5					•			1
	6							•	1
	7							•	1
	8		••	••	••	•	••	•••	14
	9		••	••	••	••	•••	•••	15
	10		•	•••	••	••	•		11
	11							••	2
	12		•••			•		••	6
	13		•						1
	14		•••					•••	6
	15		•						1
	16							••	2
	17							••	2
	18		•		•	•	••	••	5
	19					••			2
	20		••			••••			10
	21	•		•••			•••	•••	14
	22					•			1
	23				•	•	•		3
	24						••		4
	25			•					1
	26					•	•		2
	27					••			2
	28	•				••	•		4
タイプ 学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	人数		

資料Ⅲの2

B	1				•				1
	2					••			2
	3					••			2
	4		•						1
	5					•••			3
	6					•			1
	7					••			2
	8				•				1
	9			•	•				2
	10		••	•		••	•		6
	11		•••	•••	••				15
	12	••			••	••	•••		11
	13					•			1
	14		•••			•	••		8
	15		•••		•				4
	16	•••		•••					6
	17					••			2
	18		•						1
	19		•	••••		••			10
	20			••		•			3
	21	••	•			••	•••		1
タイプ 学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	人数		

資料Ⅲの3

C	1			•					2
	2	••••		•••					12
	3	•		•					2
	4				••				2
	5	•••			••				8
	6						•		1
	7				•				1
タイプ 学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	人数		

A 15

(無) 「しゃべっちゃだめ。」

A 12 六年

(三) 「油がきれそうだ。」

A 14

(無) 「しゃべっちゃだめ。」

となっている。

この二つのことから、次のように考えられよう。

一年生、二年生で、三人目、あるいは、せりふがおさえられなかった類のもの、三年生では、A 10とA 21にふりわけられ、四年生では、A 8とA 10へ移り、五・六年では、再び、A 10、A 21へそれぞれふりわけられていると

言えよう。

四年生がA 21へ移っていかないということは、四年生の「無言の行」の事例を見ると、大へん、「申しひらき」が、巾広いということがわかる。

もう少し詳述すると、

二年生のA 12、A 14に属するような子どもたちは、三年生段階に入ると、「無言の行」がおさえられる者と、あいかわらず、おさえられず、さらに他の話もおさえられなくなってしまう子どもとがいると言えそうである。

ここで、A 21類の子どもたちのようすが、たいへん問題となってくるが、後述することとして、このA 12、A 13類の子どもたちにとって何が壁になっていたかを考えてみよう。

「無言の行」さえできていれば、A 10以上にあがる可能性がでてくるわけである。

その可能性は、先述したように「無言の行」の構成をつかめるという思考パターンを持つことにある。

この「無言の行」の核心は、三人目の坊主の発言であるが、それ以前に、最後に発言してしまうのは、一人目でもないのである。全員が、発言してしまうというのが大前提である。

しかも、最後の三人目の坊主が、「しゃべってないのは、おれだけだ。」

と発言させていなければならない。

三人目の坊主は、二人目の坊主までが、発言した時、心中、ひそかに、「しめた」と思ったことであろう。しかし、そのとたん「……。」と自分の口からも声がでてしまったのである。

子どもたちの事例中に多い、「行の最中は、しゃべってはいけません。」式の発言であると、正答の「おれだけだ。」という「だけ」とするおもしろさがなくなってしまう。読む方にとっては、「おれだけだ。」と読んだ時には、その裏に「お前も」という意識が働いていなければならないわけであるが、子どもたちの事例を見ると、その「お前も」と思ったことが素直に出てきてしまっている。ここに、子どもたちのたくまざる表現意欲・能力を見ないでもないが、ここでは、「お前も」は、ぜったいに、つつみかくすべきであったのである。

読み進めていった時、読む方にとっては、三人目の坊主同様、「お前も」と心中、思うわけであるが、この「お前も」は、二人称的なとらえであり、正答である「おれだけ」は、読み手にとって、三人目の坊主を、三人称的なとらえへ追い込んでいったものである。ここで、二人称・三人称のあやふやさ、せりふの事例とが奇妙に対照されてくるのである。三人目の坊主と指定

した子どもの中にも、「しゃべってはだめ。」というせりふをはかせている子どもがいるが、これは、明らかに、坊主は、三人目をとらえたけれども、話に対して、自分自身を、三人称の場に置けなかったものと言えはしまいか。

特徴3

A 20の類が、特に五年生に多いということがあるが、これらの事例をひろってみると、

A 20

五年生

「大小小」

「きせる、きせる」

(無)「三人目」「不明」

「へんだ」「やぶ」「まぬけ」

「よくわからないから。」

となっている。

この類に属する者が、六年生に見られないわけであるが、五年生でこの類に入る子どもたちは、六年生では、どこに行っただけであろうか。

A 20は、「無言の行」が、誤答になっていることが、大きな特徴と言える。他の答は、○印、△印がついているにもかかわらず、「無言の行」だけが落ち込んでいる。

この落ち込みを克服している類を、六年生でさがすと、A 16・A 17がある。

その克服のようすも、人称については誤答となっていて、せりふのみが、なんとか、

「もう、よそう。」

「そういうあなたもしゃべった。」となっている。

先述したように、まだ、六年生のこの類に属するものは、坊主に、相手をせめるのみの発言しかとらせていないのである。先述したように、ここは明確に、せりふの上でも、坊主を、三人称たらしめる必要があるわけでありその意味では、この類に属する子どもは、その姿勢が、まだ、あやふやであると言える。

こう考えてくると、五年生で、A 20に属する者の成長の延長を、六年生のA 16・A 17の類の子どもたちのあやふやさの中に見つけられるというような感じが持てるであろう。

また、A 21について見ると

三年生

「大小小」

「きせる、きせる」

(無)「ろうそくが消えそうだ。」

「心のやさしいお医者さん」

「他の答がわからないから」

六年生

「大小小」

「きせる、きせる」

(無)「油がきれる」

「一応やってみる」

「聞いていなかった」

のように、A 20に比して、さらに、「医者」と患者」につまづきを見せているのである。

これらの事例において、「医者」と患者」に関する返答を見ると、何をか言わんやの感を持つが、結局、時間における基準についての医者、患者のそれぞれの立場におけるずれが明確に押えられなかったのであろう。

これを克服している近くの類を見ると、A 23がある。しかし、A 23は、「きせる」が、できていない。

このあたりの類に属する子どもたちが、人数が多かったのは、「無言の行」「医者」と患者」「きせる」にそれぞれつまづきを見せていることになるが、それにしても、四年生で、これに属する子どもたちがいないというのは、四年生の子どものうちのある特色を示していると言えるであろう。

六年生になると、A 16、A 17、A 18とある程度のちらばりとはばを持ってくることと、照合してみると、「しらみ」が確実に押えられる子どもの中で三つのタイプが、つまづきという点か

らしてみつけられよう。

つまり、

1 「無言の行」につまづく者

2 「医者と患者」につまづく者

3 「きせる」につまづく者
とになろう。

1 については先述した通りであるがこれが、五年生に、特徴的に表われていることが、興味深い点である。

これの克服のきざしを、A 22、A 23に見つけられないこともないが、完全に克服するとなると、A 9・A 10のところまで飛び越えて行かなければならない。

A 9・A 10にしても、四年生の子どもの現われ方から見ると、スムーズに五年生に入ってもよさそうなものであるのに、五年生では、A 20の類と、A 9・A 10の類とに大きく分かれてしまうのである。

これらの類の階梯の間にあるというべき、A 16・A 17の類が、六年生において表われている点については、学年の階梯からすれば、少々、疑問を持ちたくなる点である。なお、検討の要する所であらう。

2、については、「無言の行」に加えて「医者と患者」につまづいているわけである。

これら、二つを克服したものは、A

14に属するが、特徴の2で述べたように、三年生は、一つの間岐点と考えられよう。(空白の説明)

また、五年生のA 20で、「医者と患者」が、克服されているのに、六年生で、逆もどりがある点についても疑問を持ちたいところである。

3、については、A 20・A 21でのつまづきが、克服されているにもかかわらず、「きせる」につまづいている。この類が、四年生から表われている点は、興味深いところである。

つまり、四年生では、一名ではあるが、A 8・A 9・A 10に入るために、最後まで、つまづきになっているのが「きせる」であると言えるのである。

以上、この特徴については、学校差も考えられようが、それにしても、疑問をいだきたくないという点が多々ある。

特徴4

資料Ⅲの2のB 11に、15名がいる点に注目してみよう。

この類は、「しらみ」が×で、「きせる」「無言の行」「医者と患者」が△で、正答への可能性を秘めている子どもたちである。

これら△を確実にしているのは、B

1・B 2であるが、これは、六年生にのみ表われている。

一つ上のB 10の類を見ると、6名いる。この子どもたちは、B 11に比して「医者と患者」から克服していつているのである。

いづれにしろ、このB 11に属する子どもたちは、「しらみ」につまづきながらも、他のは、確実性を持ちつつあるという点が特徴的であらう。

「しらみ」の話は、主人とこぞうのやりとりを、土台としているが、「笑い」の構成の要素として、場面・人物の立場・声の大小の三つを持ってきている。

主人の側からすれば、お客に來たので、その場では、礼儀正しく、恥を感ぜないように、つとめたいという気持ちの副線があり、一方こぞうの方には主人に恥をかかせたくないで、親切のつもりでしらみの存在を主人に知らせるという気持ちの副線があり、「笑い」の構成は、二人の人物の気持ちの副線のからみあいにおいて、声の大小の、場への適・不適を中心としている。

いわば、主人とこぞうとの間の感情の交流状況にかかわるところで、主人の側からすると、せっかく、きちんと礼儀正しくし、恥をかくまいとしているのにと、こぞうの側からすると、せっかく親切にしらみらしき

ものがあることを教えてあげ、その上に、まちがっていたのをなおしてあげたのにと、いうからまりが、声の大小の適・不適を通して察知できなければ、笑いは起ってこないのである。

このように考えてみると、この子どもたちは、「のに」欠如型とも言えよう。

この類のものが、五・六年に表われていないことは、興味深い点であるが先述したように、六年生では、B 2・B 3へ、あるいはA類の方へすいあげられているものと考えられよう。

B 12が、11名いるが、これは、「しらみ」の他に、「医者と患者」につまづいているものである。この類が、四・五・六年で、表われている点は、特徴3で述べたことと付合しないだらうか。

また、B 19が、三年生にかたまっているという点も、特徴3で述べたことと付合していくであらう。

さらに、B 21が六年にかたまっている。この類は、A 21と類似している。ただ、「しらみ」ができていていかいなのかという差はあるが、一つの特徴的な類と考えてよからう。

特徴5

「笑い話」(小川君と大山君の話)

についてであるが、この話は、先生の「言いなおす」と、小川君の「言いなおす」における、理屈のちがいを笑いの源としている。

先生は、おそらく、大山君の言葉一字一句もろさず言いなおすことを、小川君に要求しているのであろう。その心理の裏には、ほんとうにわかったか、どうかを調べるなどという気持ちがあったかも知れぬが……。

一方、小川君の方にすれば、「言いなおす」ことは、一字一句もろさず言いなおすことはもちろんであり、大山君の意見と、同時に、同じことを言うことであると考えているわけである。いわば、言葉の一回性を押さえての意見をとなえなければ、この話は、笑い話とはならないのである。

こう考えてくると、小川君のことを小憎らしくもなるが、この話を選び出した所以は、実は、小憎らしくもなる小川君の理屈を、子どもたちが、どの程度、持っているかというのを調べるねらいがあったのである。いわば、子どもが、自分自身の感情と言葉というものを、どのように身につけて、過しているかということである。

この話の笑いは、大人たちにとって、笑うに笑えないような、きびしき

も感じるが、そこで、意図的に、「笑い話」とことわったわけである。さて、その結果であるが、

ほとんどの事例が、資料Ⅱで見る通り、

「聞いていなかった。」

「わからないから。」

「わすれた。」

「あたまで悪い。」

「言いまちがえる。」

などであった。

このお話のような状況は、子どもたちにとっては、お話でなく、現実そのものであったようである。そこに、言葉をさしはさみ、知恵を働かせる余裕すらないようである。

逆にみると、子どもたちは、それだけ、現実の生活実感と言葉を結びつけて考えているとも言えるが、この結果からすると、そこから、ひるがえって、言葉と自分との間に目を向けるなどという姿勢はないかの如くである。

子どもたちの、からくり虚構への姿勢が、言葉に持たせたはずの力とがだいぶ距離を持っていると言えよう。

この結果からだけでは、早計でもあろうが、言葉には、必らず、自分がつきまとい、自分がつきまとうからこそ自分の構造が、言葉にうつるなどということを、もう一度、子どもたちに話してやりたくもなる所以である。

四、まとめ

前記のように、いくつかの特徴をあげてきたが、これら特徴を通してみると、子どもたちの持っている、いくつかのグループが見つかようである。資料Ⅱの人数の多い所が、グループの核になりそうなので、仮に

- A グループ (A 8・A 9・A 10)
- A' " (A 20)
- A' " (A 21)
- B " (B 11)
- B' " (B 12)
- B' " (B 19)
- B' " (B 21)

と名づけるとすると、()内の類が核となつて、他の類への移動(成長の盛衰)を行なっていると言える。そこでは、また、「無言の行」につまづくタイプ、「医者」と患者」につまづくタイプ、「きせる」につまづくタイプとがあろう。

A' / A'グループの中では、「無言の行」と「医者」と患者」につまづいていくものの二つのタイプにわけられよう。また、B / B'グループまででは、「しらみ」がおさえられなくとも、「無言の行」「医者」と患者」をおさえ、てゆくものと、「きせる」を落として

いくものと二つのタイプにわけられよう。

しかし、資料Ⅲの3、C 2に一年生が9名いる。

このことは、人称の立場、自分の身の置きどころによつて決まるということとは先述したが、この一年生の場合には三人目というのは、ただ、単なる順列方式のようにとらえたのではなからうか。せりふからしてみると、なにか、三人目というものが、三角の関係にある三人称ではなく、数列表式の、直線上の三人称というふうに見えるのである。(文責 飯住)

相模原市清新小学校前

山本文房具店

電話 相模原 72-2841番